

娘のマイホーム

吉井 有希恵

娘の家族が、ようやく念願のマイホームに引っ越した。引っ越し屋さんが引き上げた後、娘の口から出た言葉は「昨日の夜は、引っ越しが心配で、寝られなかった」だった。新しい家は元の家から近く、運べる物は夫と一人で少しずつ運び、不用品は自分たちでリサイクルセンターに持って行っており、うまくやっているなど思っていたので意外だった。

その時、娘の大学卒業直後の引っ越しを思い出した。その前日に訪ねると、本人は卒業パーティーに出かけており、部屋は何も片付いていなかった。3年分の学生生活のあれこれが、床いっぱいに散らかっていた。その日の遅く、娘は帰って来たが、疲れてすぐ寝てしまった。結局、引っ越し屋さんの寛容さで、なんとか終えることができたのだが。

アバウトでのんきだった娘が、今回は、眠れないほど心配症になっていたかと、そのギャップに笑った。

社会に出てからは、愚痴をこぼしながらも職場になじみ、友人に紹介してもらった今の夫と結婚し、今は、小学生と保育園児に号令をかけながら、共働きを続ける普通のたくましい母親だ。

けれど、それに続けて言った言葉は「不眠の辛さが分かった。年を取ったり辛いことがあると、こんな風に不眠になるのかなー」。大変だけど充実した毎日が、これからも続くはず、まだまだ人生の目標に向かって進んで行くはずと、本人も周りも思い込んでいたその時、唐突な言葉に聞こえた。そして、そんなことが、娘の家

族に今すぐにも起きるような不安な気持ちが、ふっと横切った。

解決できない不運がどこに待っているかも知れない、年月が運んでくる悲しみも必ずある。不眠になったり、心を病むことがあるかもしれない。娘にもそんな日が来ることもあるかもしれない。

それはまだ遠い日かもしれないが、明日かもしれない。そして、新しい身内や友人の身に起きるかもしれない。

初めての不眠体験は娘にもちよつとした衝撃だったようだが、今の幸運を思い、不運な人に、少しでも気持ちを寄せられる人になるかもしれないなどと思い巡らした。

娘の不眠はその一日だけだったらしい。引っ越しの日の言葉も忘れたかのように、依然と変わらないドタバタの毎日に戻っている。

目の前の片付かない荷物を前に「マイホームで夢のような暮らしが始まると思うっていたけど、そうはいかないわ」と気楽なことを言っている。

作者 吉井有希恵

題名 娘のマイホーム

原典 山陽新聞夕刊エッセー

原典の掲載日 2019.1